

文芸思潮

第17回文芸思潮 **エッセイ賞発表**

最優秀賞 奇妙な依頼 平尾富雄

第16回

まほろば賞発表

「光復香港」

「よもつ耶」

鈴木友範

「更待月のこと」 海邦智子

特集 **イランの文学と世界から**

特集 **文芸評論の危機**

座談会 **文芸評論の現状——危機と打開**

杉田俊介／浜崎洋介／藤田直哉／川口好美／井口時男

勝又浩／富岡幸二郎／清水良典／小林広一

画細画二千年紀 原爆開発プロジェクト 五十嵐勉

マンハッタン計画

百期首会 津本陽／大久保智弘 岳真也

藤原緋沙子和加藤淳

2022 秋 号

第 85 号

全国同人雑誌最優秀賞 第16回 まほろば賞

発表

昨年からまほろば賞は全国同人雑誌協会と文芸思潮が主催することになりました。今後もこの形で進めさせていただきますので、どうぞよろしくお願ひします。

第一六回新全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」選考会は、二〇二二年七月一七日に東京都大田区民プラザ会議室において、三田誠広氏、中上紀氏、小浜清志氏、五十嵐勉「文芸思潮」編集長の四名の選考委員によって慎重に審議が行なわれました。作品ごとに各選考委員が鋭利に批評し、熱い議論が交わされました。厳正な審査の結果、左記のように決定いたしましたので、ここに選評とともに発表させていただきます。

また全国からの読者の投票と寄付による読者賞の投票および内容の結果も併せてここに掲載させていただきます。昨年「まほろば賞」は受賞作品には、賞状と賞金三十万円（賞金は主に寄付によるものです。また二人同時受賞の場合は、恐れ入りますが、一人二十万円とさせていただきます）および記念トロフィーを贈らせていただくこと

となりました。河林満賞にもそれぞれ賞状と賞金十万円と記念品を、また読者賞には投票賞金と優秀賞賞金五万円および記念品を贈らせていただきます。優秀賞にも記念品と賞金五万円を贈らせていただきます。

今後も全国の同人雑誌の中から優れた作品が生まれることを祈念し、たくさんの方の同人雑誌の作品が全国同人協会・全国同人雑誌振興会及び文芸思潮に寄せられることを期待しております。

また、どうぞ作品の推薦にもいっそう多数の方が御参加くださるようお願いいたします。また積極的に読者賞への投票に加わっていただき、ぜひ皆様自らの手でこの賞を盛り上げ、育てていただきたいと思います。全国の同人雑誌諸氏の御参加と御支持を切に願ひする次第です。

またこの結果及び選評とその感想・批評の動画、また優秀作品はインターネット「文芸思潮」ホームページでも発表される予定です。どうぞ御覧ください。

第16回全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

「光復香港」

〔季刊作家〕99号

鈴木友範

「『よもつ耶』

ふけまちづき

更待月のこと」

〔札幌文学〕91号

海邦智子

河林満賞

「鴉」

〔南風〕48号

紺野夏子

読者賞

「夢で逢いましょう」

〔朝〕42号

天野いずみ

まほろば賞賞金は、木内是壽氏、故蘭藍子氏、三田村博史氏、来の宮あんず氏、故原石寛氏、夏日美子氏、前岡光明氏、今田真理子氏、二宮英郷氏、堀井清氏、西島雅博氏、高橋惟文氏、勝又浩氏、越山しづか氏、「北斗」などの御寄付によるものです。ここに厚く御礼申し上げます。また「狐火」「安藝文学」「べん」「海」「文芸中部」など文芸思潮同人誌団体会員の御協力にも厚く御礼申し上げます。



みた まさひろ
1948 大阪生まれ
早稲田大学文学部卒
77「僕って何」で芥川賞受賞
作品はほかに「いちご同盟」
「空海」「親鸞」など
最近の本「遠き春の日々」
「少年空海アインシュタイン時
空を超える」「天海」
日本文藝家協会副理事長
武蔵野大学名誉教授

二作同時受賞

三田誠広

今回は作品のレベルが例年より高かった。とくに二作品の評価が均衡していて二作同時受賞となった。『よもつ耶(更待月のこと)』(海邦智子)は死に近いタクシー運転手の車に次々と乗客が乗り込み、はかない人生のさまざまな局面を見せていくという構成で、リアリズムを超越した幻想的な作風が効果を挙げている。最後に乗り込んできたのは主人公の亡くした妻と子で、そのまま車は黄泉の国に旅立っていくようだ。単なる思いつきの幻想譚ではなく、そこには作者の確固とした世界観、死生観がこめられていて、

の賛同を得られなかったが、ほくはこの作品の独創性を評価したい。

時代の空気を描いているという点では、『村上君と優のこと』(若栗清子)に注目したい。ロシアのサハリンから来たという金髪の少年と、母子家庭の息子との交流を描いた作品で、ありきたりな差別を受けながらも前向きに生きようとする少年たちの姿が明るく鮮明に描写されている。とくに金髪の少年が髪を黒く染め、日本人の少年が金髪になるといふ展開がおもしろく、小説としての楽しさがあった。『夢で逢いましょう』はいくぶん軽い文体で、不本意な閑職に回された中年女性が、夢と幻想の中にのめりこんでいく姿が描かれている。文体が軽いということはリーダーブルなのだが、それが災いして軽い読み物と思って読み飛ばされる惧れのある作品だ。しかしじっくり読んでみると、幻想にすがらざるをえないヒロインの孤独感が伝わってきて、なかなかの秀作だと感じられた。

他の選考委員の評価が得られなかった『サイクロイド』(荻野史)に、ほくは一つの可能性を感じた。サイクロイドというのは直線上を転がっていく円の円周上の一点の軌跡を描いた曲線なのだが、数学になじみのない人にとって聞き慣れない用語だろう。作者は詩人としての素養のある人のようで、この作品も散文詩とっていい文体で、断片的な叙述がアトランダムにつながっていく構成になって

揺るぎのない作品世界を構成している。『光復香港』(鈴木友範)はほくと同世代の書き手で、かつての学生運動と現在の香港の民主化運動を重ね合わせた構成に工夫があった。半世紀前の日本の学生運動を描いた部分は作者の実体験なのだろう。現在の香港を描いた部分も作者の体験から生じたものと思われ、双方の世界にリアリティーがあった。学生運動を描いた作品は多く書かれているはずだが、現代の香港と重ね合わせることで、独自の視点で設定されている点を高く評価したい。

他の候補作も充実していた。『鴉』(紺野夏子)は長く消息を絶っていた父親が、実はつい最近まで存命していて、母親とは文通していたという設定で、娘がその父親の住居を訪ねていくところから始まる。娘にとって父親は過去の人だ。ところが父親が書斎にしていたと思われる部屋の窓の外には鴉がいてこちらを見ている。鴉は父親の姿を探しているようにも見える。そのあたりから、家族とは何かという深く重いテーマが、重厚な文体とともに読者の胸に迫ってくる。『水水母』(木山葉子)も濃密な文体が作品世界を支えている。別れた夫が大量に保有していた学生時代の女友達からの手紙が、ヒロインの胸に癒しがたい傷を穿っている。その過去へのこだわりが、精神を病んだような幻想的な断片が交錯する独自の作品世界へと読者を誘う。リアリズム作品と見ると辻褃の合わない点が多く他の委員

いる。それでもテーマはある。二人いる娘のうちの一人が障害をかかえているのだ。ほくは障害者本人や家族が書いた作文コンクールの選考を十年くらい続けているので、障害者の悲喜こもごもの日常については数多くの作品を読んできた。そこにはさまざまな世界観が描かれているのだが、は一致している。この作品にも哲学がある。しかしそれはヒューマニズムとか、運命を受け容れる諦念とかいったものとは隔絶した、きわめてユニークな視点だ。書き手が詩人であり、また数学にも見識をもった人で、そこから詩的な想像力とサイクロイドという図形のもつ不思議なイメージが結びついた、独特な詩的な言辭が次から次へと心地好く紡ぎ出されて、魔法のような作品空間が現出することになる。残念ながら既存詩人の作品を引用したところが二箇所あり、効果を挙げているようでないが、作品としての独自性を損なっているように感じられる。また詩的なレトリックが高踏的で多くの読者がついていけないという難点は確かにある。だが小説というのは本来、何をどう書いてもいい自由なものだ。読者がどう思おうと、これを書きたいという切実な思いがあれば、書きたいことを書けばいいのであって、作品の評価などは二の次というべきだろう。こういう作品が掲載されているところに、同人誌というもの



こはま きよし
1950 沖縄県生まれ
劇団四季など様々な職を遍歴
87 作家中上健次に師事、マネージャーを務めるかたわら文学修行
88「風の河」で文学界新人賞を受賞
他の作品に「消える島」「後生橋」「光の群れ」「火の闇」などがある

同人雑誌の質の高さ

小浜清志

今回は七作品と少し多めではあったが、どれも趣があり同人誌の質の高さを覗かせてくれた。

「村上君と優のこと」若栗清子

五月の午後、という独特な書き出しで始まるこの作品はウラジオストクから転校してきた村上ミハイル君と息子の優の付き合いを見守っている母の視点から展開していく。

「私」は二年前に離婚してフラワーアレンジメントの職を得て優との二人暮らしを始めたばかりである。五月の午後に優が友だちを連れてきた様子があったので茶菓子をお盆にのせて運んで行ったとき知らない国から来た少年であることを知る。その日から連日のように白金に近い髪の少年は

2DKのわが家を訪れる。

それから半年くらい経って事件が起こった。優が叫ぶ「毎日同じ服を着ている。汚いって、女子が」二枚のセーターを交互に着せていたが女子の目にはダサイ汚いとしか映らなかつたであろう。「私」はすぐに車をとばしてデパートへ。優が心配するほどにブランドの服を買ひあさる。この行動もそうであるが、作者の優しさが至る所にちりばめられている。六年生になつてもミハイルは毎日のように通ってきて時々夕飯を共にするようになる。決して裕福な生活をしている訳ではないが、優の友だちということでもミハイルをいつも欲待する心の豊かさは卒業式にも現われる。ミハイルの母親を色々詮索する声が聞こえる。私はそれらの声に対抗するようにユリアさんの隣りに座り、生まれたばかりの赤ちゃんの可愛らしさを手ぶり身ぶりで伝える。そのような行動をすれば周りから揶揄されるかも知れないが、私にはどうでもいいことで、ユリアさんの孤立に寄り添いたい。その心は優にも受けつがれていて、中学生になりミハイルが「北方領土を返せ」と同級生に言われたことを聞き、ある日突然に黒髪を金髪にする。だが、ミハイルも黒髪に変え、二人向き合ったとき大笑いをして髪は二人とも元に戻るといふ出来事でも相手を思いやる心のあり様がこの小説の美しいところである。

「鴉」紺野夏子

戦の理由を見い出すことはできなかった。

「水水母」木山葉子

水母と海水の明確な区分ができないように、この作品も現実なのか妄想なのか判然としないまま展開している所が最大の魅力であろう。結婚式をあげて三日目に目にした夫の高校時代の女性川島芽子からの大量の手紙から妄想が走りだす。

出張から戻った夫に手紙の束をさし出し処分してと訴えるが、安易に頷いてくれない。仕方なく夫が手紙を焼いていると姑が起き出してきて夫のしていることを咎め、絵里子をなじった。絵里子の目には部屋にある置き物さえ川島芽子の贈り物に見えてくる。手紙に出てくる若村という男が二人の結婚を祝いたいと言って待ち合わせをする。若村らしい男の近くで絵里子は待っていたが、現われた夫は芽子のいる方へかけていき、二人の会話がはつきりと聞こえる。これは不自然な書き方ではないかと思つたが、このことすらも妄想だとすればつじつまは合ってくる。

手紙すら妄想で作りあげた産物ではないかと想像してしまふ。小説の力にあらためて感動した。

「よもつ耶」〜更待月のこと」海邦智子

当選作になった作品であるが、まず文章とは何でも作りあげることができるのだというのに驚いた。この世とあの世の境に建つ「よもつ耶」で繰り返される男の苦惱。

中学生の時に家を出たままになっていた父の家を見て来て欲しいと入院した母から頼まれ芽子は戸惑う。何十年も前にいなくなっていた父が生きていて、母は連絡を取っていた。芽子は両親のなれそめに想いをはせ、夫婦の有り様の不思議さを感じながら、母の頼みで二度目の父の家の訪問をする。そこで大家さんと出会い父の現状のすべてが解明する。年上の母は代々医者の子に育ち、自らも医師として生きている。母の結婚を祖父母は快く受けとめたが、周りにはそうでない者が多かった。だから親類の集まりがあると着慣れないスーツを着て、席の隅でコップを傾ける父を芽子はひっそりと眺めるのが常だった。

のけ者のような父は親類の中ではカラスのような存在ではなかつたか。また、社会的にも立派な肩書きの母とは違い、大工仕事得意な父は母とはあまりにも不似合いだったから家を出たのではないか。作者の筆は芽え、タイトルの通りの読後感を残してくれた。

「サイクロイド」荻野史

大失恋から小学生の頃の団体競技を思い出す。円転するリングの中の自分に接近してくる大空の太陽と雲。くるくるまわるリングの永遠性。そして、二人目の子供が障害を持って生まれてから、平凡に円転していた生活の連続が二番目の世界に強制的に局限される。色々な挑戦を試みていることは理解できるのだが、円転したことのない私には挑

妻子をガス自殺でなくした男に、真湖ママが釘を刺す。「あんな、後追って死ぬ気でしょ。そんなこと誰も許さないわよ。あんなのあの世の扉が開くまで、その日が来るまで生き抜くの、どんなに孤独で苦しくても」

そして、男はよもつ耶の住人となり、タクシーの運転手をして糊口をしのいでいる。客待ちの場所はいつもの坂の上。深夜だというのに老婆が乗り込んでくる。老婆は初雪が降ると死んだ主人の墓参りに行くという。その老婆さんが指につけていたアメジストはかつて男が二月生まれの女房に贈ったものだった。

不思議な老婆さんに乗せてから一ヶ月位、中年の女性がタクシーに乗り込んで来た。行き先はジャンプ台のある大倉山。女がジャンプ台で練習をしている息子の思い出を淡々と語る。短いラインの文章を残して息子は空へ消えたという。そして、次々と現われる乗客の誰れもが辛い過去をひきづり懊悩しながら生きていることを知らされる。

最後に死んだ女房と息子が乗り込んでくる。心地よいリズムの文と、あり得ないがくつきりと浮かんでくる状況に文学の気高さを感じた。

「夢で逢いましょう」天野いずみ

夢の中で男と交わっていた。夢の中で感じるのは初めてだった。その快感がすさまじかったので、下着にそっと手を入れてみたが、何の変化もなかった。書き出しのインパクト

は「サイクロイド」と「水水母」「よもつ耶」「更待月」を高く評価し、中上氏は「よもつ耶」「更待月」と「光復香港」を評価した。小浜氏は「光復香港」を買っていた。私はどれもいい面があり、捨てがたいものがあつたので、悩んだが、「光復香港」の重い量感と、「よもつ耶」「更待月」のユニークな表現は、称揚を外すわけにはいかないと思ひ、最後に提案された二作受賞に同意した。このように分裂したのは、それぞれがいい作品であることの証左でもあるだろう。

鈴木友範氏の「光復香港」（『季刊作家』99号）は、出張先の香港で民主化運動の弾圧に巻き込まれていくのと同時に、自身の学生運動を回顧し、反抗の情熱の意味を問い返す作品である。香港の学生たちの反抗の姿が鮮やかに浮かび上がると同時に、自身の革命へ投じた情熱の挫折の辛酸と苦渋が交錯して、理想に向けて抵抗する人生の陰影が掘削される。結局は圧殺されるしかないその結末に、人間としてどう希望に繋げるか、胸に受け止めるべきものは提出されている。全其闘世代も、今しか書き残せない時期に入っている。さらに書き続けて残すべきものを残していつてほしい。その願いを込めて、「まほろば賞」に強く推薦した。同時受賞となった海邦智子氏の「よもつ耶」「更待月（ふげまちづき）のこと」（『札幌文学』91号）は、発想が独特で、タイトル、ペンネームからして変わっている。ルビなしでは読めない

クトのすごさに引き込まれた作品だった。

「光復香港」鈴木友範

現代の香港と過去の学生運動をからませた力作である。描写も構成も素晴らしく、私は一番強く押した。香港の有り方もかつての学生運動も歴史に潜んでいる不条理との戦いであるが、それらは時間の流れに淘汰されていくだろうとの予感が、この作品の素晴らしい所である。



いがらし つとむ
1949 山梨県生まれ
早稲田大学文学部文芸科卒
79 「流謫の島」群像新人長編小説賞
84-90 カンボジアを中心に東南アジアを取材「東南アジア通信」編集長
主著「緑の手紙」（読売新聞・NTT プリンテック「インターネット文芸」最優秀賞）・「鉄の光」「ノンちゃん、NONGCHAN / 聖丘寺院へ」「破壊者たち」

重い量感とユニークさ

五十嵐勉

第一六回まほろば賞は、結果的に選考が三つに割れた。

「鴉」「水水母」への支持、「サイクロイド」「村上君と優ること」「夢で逢いましょう」への支持、「よもつ耶」「更待月のこと」「光復香港」への支持と分裂した。三田氏

言葉が、むしろ独自の世界を切り開いている。そしてその風変わりな世界の底に、死へ旅立っていく者の深い悲愁が流れている。この死者を包み込んで流れる旋律に、魅力がある。葬送の美しい調べがあるところに、胸底への刻印がある。これを大事にして、この世界造形を持続していつてほしい。

河林満賞に輝いた、紺野夏子氏の「鴉」（『南風』48号）は、地味な題材だが、彫拓の手腕には、注目すべき力量がある。これで三度目の優秀作登場になるが、どの題材も鮮やかに処理して、小説作品として形を与える技量は高い。しかもだんだん精度が上がっている。一読した時よりも、読み込むに従って、精緻な味わいが奥を増してくる。失踪した父親の最期を、空家に棲む鴉との交誼に託して、枯らせるように終わるシーンは、人生の乾いた一つの結末を象徴している。あの世から、河林満も授賞を喜んでくれていと思う。

読者賞を獲得した天野いずみ氏の「夢で逢いましょう」（『朝』42号）は、タイトルが一見歌謡曲を想わせる軽さを有しているが、中身をよく読むと、練りあげられたわかりやすい文章の奥に、厳しく磨かれた言葉の艶があり、それが安定した構築を示している。長年の鍛錬による表現力であることが窺われ、酔いに誘われる奏鳴感を宿している。更なる結実をめざして、創作を持続してほしい。

いる香港学生が、自分の家のヘルパーにはぞんざいな態度をとるというアジア的な矛盾にも注目したい。

もう一作品のまほろば賞受賞作を紹介する。海邦智子氏の『「よもつ耶」〜更待月のこと』だ。子供と妻を失い、夜間のタクシー運転手に転身した主人公が、業務を介して出会った人々から、彼らの物語を断片的に聞いていく。いっしょに読み手は、このタクシーが、死にたい人に次々と出会いながら夜を走る、すなわち死と背中合わせの乗り物であることに気づくのだ。

この作品の中に登場する坂の上の（よもつ耶）という磁場は、「黄泉比良坂」から来ている。生者の住むところと死者の住むところの境界にあるという黄泉比良坂。記紀では、火の神を産んで死んだ女神伊邪那美尊を、男神伊邪諾尊が、来るなど言われていたにもかかわらず黄泉の国に追っついていき、そうして醜く変化した妻を恐れて逃げ帰り、途中追い付かれ、口論の果てに離縁する場所とされている。だがここでは、愛し合う死者と生者を結び付けるところだ。あるいは、あの世とこの世の間で迷っている者がたどり着くところ。仕事が忙しく一人で悩んだ妻に息子と心中されてしまったという過去を持つ男。男はここを拠点にタクシーを走らせ、待っている。そう、愛する者たちが乗ってくるのを。そのタクシーに乗って三人がどこへ行くかは読み手に委ねられている。あの世か、この世か。妻が伊邪

を助け、寄り添うところには共感する。

萩野央氏の「サイクロイド」は、最も難解であり、一般的な読者には少々読みにくさが残るだろう。主人公は、「不完全」な家族を完全にするために、この「円」すなわちサイクロイドを重ねているようで、実はこんな円自体、本当は不要なのだ、叫んでいるのかもしれない。閉じられた円環は美しいかもしれないが、無言Vだと作品は告げる。

木山葉子氏の「水水母」では、夫が処分することの出来ない千通もの女子高生からの手紙が、潮が引いた砂浜に数多に広がる水水母に重なった。水水母は死んでいるようにも生きているようにも見えるが、過去の手紙もそうである。だから、「ぶちまける」のだ。

選考会が終わると、まだまだ夏はこれからなのに、一瞬涼しい風が吹いた気がした。



第16回まほろば賞選考会風景 2022.7.17 大田区民プラザ会議室で

那美尊のように、まだ来るな、来てはいけなないと、男を黄泉比良坂に留めていた場所は、いずれにしても生半可な所であるはずがない。

「河林賞」を受賞した紺野夏子氏の「鴉」は、他人には絶対に理解することが不可能な、その夫婦だけの独特の関係性が描かれた作品だ。母と別れた父を思い、主人公である娘が鴉と敵対する様子が、人間同士の戦いのごとく生々しく描かれている。家族との繊細な関係、例えば嫌っていた父の作った家具に兄がこだわる場面などは、父への隠れた思いと共に丁寧に描かれ、痛々しさが伝わる。鴉は使者のように不穏な言葉を主人公に告げる。家族でも、いや家族であるが故に介入してはならない領域の存在を黒い羽根で警告するのだ。

他の候補作も読みごたえのある作品が続いた。

天野いずみ氏の「夢で逢いましょう」では、夢の中で起きていることがぼんやりと立ち現れ現実を侵食していく。逃避のように、若い恋の記憶をなぞる夢にのめり込んでいく。現実への一歩を踏み出すラストが素敵だ。

若栗清子氏の「村上君と優のこと」は、ロシアルーツの村上君が光りながら小説に登場する冒頭に、神話的な物語性を感じる。本作が書かれたのはロシアによるウクライナ進攻の前と察しつつも、今であれば異なる形での展開の可能性もあり得ると注目した。また、主人公が村上君の母親

まほろば賞 受賞の言葉 鈴木友範

この度は「まほろば賞」に選出して頂き、ありがとうございます。
 仕事を言い訳にして筆を折り、更に自費出版した本を眺めて悦に入るとい
 形で見切りをつけていましたが、しかし、もっと書きたいという思いが突き上
 がり、数年前から再び原稿に向かって半年に一作を目標にして頑張ってきました。
 ただ、特にコロナパンデミックのせいで合評会の開催もままならず、先輩
 諸氏の指導も頂けないという制約のある日々に苛立っていた最中の朗報でした。
 「仕事柄、異なる国々の歴史や文化を見聞き出来たことは幸いでした。当然に
 も香港現地で目の当たりにした「一国二制度」を巡る闘ぎ合いは、私もまた書
 かずにいられませんでした。今後も香港を一つのテーマにしていくつもりです。
 一方で受賞ということを意識せず、書きたいものを書くという原点に戻り、
 表現者としてさらなる高みを目指そうと決意を新たにしているところです。
 あらためて感謝申し上げます。

まほろば賞

「光復香港」

鈴木友範



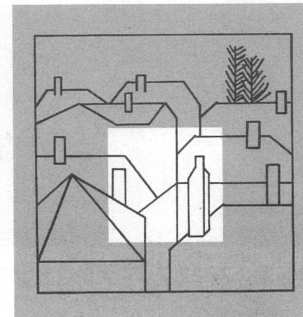
鈴木友範

すずき とものり
 1948 岐阜県下呂市生まれ
 73 岐阜大学農学部卒業
 89 ファインアンドソフトテクノ
 ロジー株式会社設立
 代表取締役就任
 2003 自費出版「愛惜の炎」刊行
 05 「季刊作家」同人
 21 小島信夫文学賞県知事賞受賞

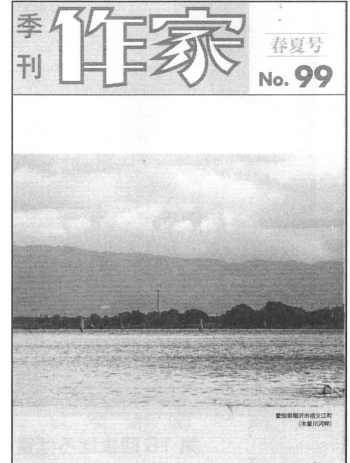


札幌文学

第91号



2021年8月 札幌文学会



まほろば賞

「『よもつ耶』
 更待月のこと」

海邦智子



海邦智子

みくに ともこ
 1962 函館生まれ
 83 北海道武蔵女子短期大学卒
 業
 83 以後(株)札幌ツアーリスト、近
 畿日本ツアーリスト(株)、(株)HKワ
 クス、(株)秋吉などに勤務
 2004 札幌文学会同人
 05 北海道鉄道文学会同人
 現在専門学校在学
 「愛しき人」で第9回鉄道文学大
 賞優秀賞受賞



まほろば賞 受賞の言葉 海邦智子

このたびの『まほろば賞』受賞の一報をいただいた時、思わず驚きの声が脳天から突き抜け、歓喜の後の余韻が眠
 りにつくまで私を包んでくれました。全国の多くの同人雑誌作品の中から優秀作に選出していただいた時点で札幌文
 学会同人として代表の田中和夫氏、編集人の坂本順子氏に少しは恩返しが出来たと思っておりましたが、今度こそ本
 当の恩返しが出来たと思います。私の創作活動は四十歳で会社を辞めて地元新聞社の文化センター『初めての文章教
 室』からでした。そこで講師であった田中氏に教えを乞い札幌文学会に入会させていただき、諸先輩からの厳しいお
 声に励まされて今に至ります。十代の頃から友人たちや家族と一緒に過ごすよりも独りの時間が大好きで自身の内面
 と外面の乖離に途方に暮れたこともありましたが、創作の世界に出会い、今、私は心のままに自由に泳いでいます。
 私の世界に登場する者たちは全てが愛おしい存在であり、時として主人公になります。今作の主人公も前作『孤灯の
 下』での登場は『よもつ耶』の住人の一人にしかすぎず、登場は一行にも及びませんでした。そんな「彼」が、私を
 『まほろば賞』まで導いてくれました。今回の受賞を励みに泳ぎの手を止めることなく、札幌文学会と共に海邦智子
 の世界を創り上げてゆきたいと思えます。
 貴協会並びに貴誌の益々のご発展をお祈り申し上げます。ありがとうございます。